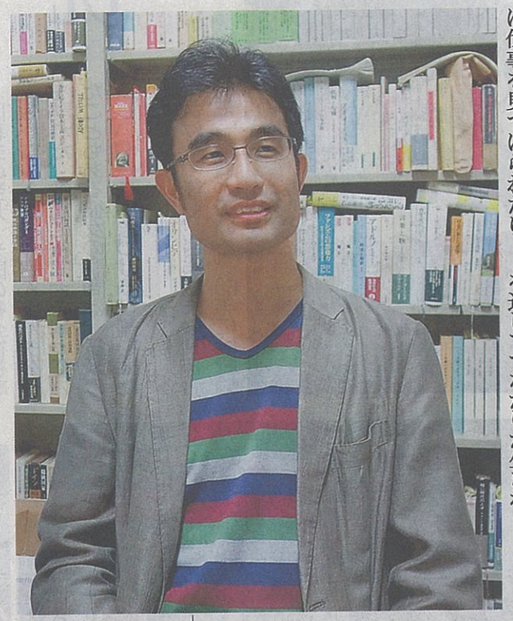
人と社会 取り持つ"縁食"

広がる「子ども食堂」効果は

藤原辰史京大准教授に聞く

子ども食堂など、食を通してゆるやかに人と人とがつながる場所を「縁食」と名付け、その大切さを提唱する人がいる。京都大人文科学研究所の藤原辰史准教授（41）。縁食がもたらす効果について、話を聞いた。



「人間関係は味の感覚に回収される。『酸っぱい思い出』『甘い記憶』と微妙な気持ちを味で表現する」と話す藤原辰史さん（京都市左京区）

「縁食とは、食を通じたゆるやかな集いの形。家族や共同体といったつながりの強い人と食べる『共食』でもなく、独りぼっちで食べる『孤食』でもない。共食と孤食の間にある形態を、縁食と名付けました」

この形態は、これまでにもあったという。例えばヨーロッパの居酒屋。ふらっと立ち寄って一人で飲めるうえ、いろんな人と出会えて情報も得られた。さらに仕事を見つけられたり、困っている人を助けたりと、ハローワークや市役所的な役割も果たしてきた。

「その機能や効果はだんだんと失われてきました。チェーン店化や客の回転率を上げるなど、大手企業が金をもうける場所にしてしまった。日本のフードコートでも、『ここで勉強してはいけません』など、できることが限られています」

一方で、見知らぬ人と食を通じてつながりが生まれる集いの場が、再び注目されているという。藤原さんが縁食と名付けたのがそれだ。代表例が子ども食堂で、地域の子どもたちに無料や低額で食事を提供し、居場所も担う。ここ数年で急増し、全国で2200カ所を超えるとされる。

食通じコミュニティー形成

「19世紀の産業革命以降に、恋愛で男女の関係を築き、愛を中心として、子どもを育て親を介護するという近代的な核家族像ができた。でも貧富の差が広がり、子どもの貧困やシングルで子育てをしている人が増えている今の状況では、『家族愛』モデルが成り立たない。地域や学校が栄養を与えないと、子どもが育たなくなる現実があります」

貧困は子どもだけではない。引きこもりの人、1人暮らしのお年寄りなど、大人にとっても切実な問題だ。「安い値段でおにぎりや豚汁が食べられて、漫画や本があり、長居できる。そんな縁食の場が各地にあればと思います。縁食の縁とは『ふち』『へり』とも読む。テーブルの端に座り、一人で漫画を読んでいてもいい。まさに『ふち』にいるだけですが、毎回そこに座れば、その人の存在が見え、つながりが生まれる。家から出て社会と触れる居場所になる」

縁食はまた、子育ての考え方を変える可能性を持つ。「親が1から10までの全てを育てるという時代は終わりつつあり、学校と親が子どもを育てることも難しいと分かり始めている。子ども食堂のように、みんなで育てていくという感覚が生まれやすくなる」

暮らしや社会について考え、意見を交わす場にもなるという。「日本は一般住民が政治的な意見を交換する場が少なく、『自分たちが主権者である』という意識が欠けがち。お互いが何を考え、意見が違うということを確認しあえる井戸端会議的な場所が必要です。かつてカフェやレストランに人々が集まって議論を重ねたように、その場を今、担うのが縁食。子育て中の人がSNSに頼るのは、家事に忙殺されて時間がないからで、縁食の場なら食事が確保できる。食べものが目の前にあると話しやすくなり、コミュニケーションの幅も広がる。縁食とは、栄養補給の場所、居場所、コミュニティーの形成の場です」

（行司千絵）